



現代日本語における常体・敬体を再考する : BCCWJ に基づく調査

肖, 錦蓮

(Citation)

統計数理研究所共同研究レポート, 414:129-143

(Issue Date)

2019-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009074>



現代日本語における常体・敬体を再考する

—BCCWJ に基づく調査—

肖 錦蓮(神戸大学 大学院研究生)

syokinren@yahoo.co.jp

A Second Thought on Polite-style and Plain-style in Japanese
Based on Survey Using BCCWJ Corpus
XIAO Jinlian(Kobe University, Research Student)

要約

日本語の文体は、大きく常体と敬体という2つに分けられる。従来、常体と敬体について、多くの研究がなされているが、その大部分は主観・内省に基づく理論的な研究であって、大規模な言語データを踏まえた計量的な研究は必ずしも十分ではない。そこで本研究では、現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)を使用し、現代日本語における2つの文体を、(1)常体・敬体の使用状況はジャンル別にどのように変化しているのか、(2)常体・敬体の使用状況は年代別にどのように変化しているのか、(3)ジャンル差と年代差のどちらがより常体・敬体の使用状況に大きく影響を及ぼしているか、という3つの観点から調べた。その結果、(1') ジャンルによって、常体率は100%から5.13%まで20倍近くの変動が存在することである。(2') 1970年代から2000年まで、書籍、白書ともに常体率が低下すること、(3') ジャンル差の方がより常体・敬体の使用状況に大きく影響を及ぼしていること、などが示された。

キーワード

常体, 敬体, 時代差, ジャンル差

1. はじめに

日本語の文体は、大きく常体(「だ・である体」)と敬体(「です・ます体」)という2つに分けられる。肖(2019)は、台湾の日本語学習者の日本語による作文を時系列的に収録した LARP at SCU コーパスを使用し、学習者の基調文体が敬体から常体へ変わる「常体シフト」の発生について調査した。その結果、(1)常体シフトは学習開始後およそ29ヶ月頃に起こること、(2)学習者は常体シフトの発生時期によって3つのグループに分けられること、(3)常体シフトは時間要因以外に、テーマの公的性や距離性、授業外での日本語発話機会の有無に影響されること、などが示された。しかしなが

ら、肖(2019)は日本語学習者の文体しか調査しておらず、日本語母語話者が書き言葉において、常体と敬体をどのように使用しているかは必ずしも明らかになっていない。

なお、日本語母語話者の書き言葉における常体と敬体の問題を考える場合、2つの観点に注目する必要がある。1点目はジャンル差である(なお、「ジャンル」の概念は必ずしも明確なものではなく、「レジスター」、「メディア」、「テキストタイプ」などの用語が使用されることもある。本研究では、これらを総称する観点で、「ジャンル」という語を統一して使用する)。現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)の異なるジャンルから無作為に取った以下の3つの例を見てみよう。

- (1) 地域では、地域子育て支援センターやつどいの広場が設けられ、それらのサービスが子育てをする親に浸透しつつある。(白書, 2005)
- (2) 国民に謝罪したうえで「漏えいへの政府の関与はない」と強調した。(新聞, 2004)
- (3) 感染を防ぐためにも、外出を控えることが重要です。(広報紙, 2008)

(1)～(3)は、BCCWJにおける3つの異なるジャンルからそれぞれ無作為に取り出した文である。上記に示されるように、不特定多数の読み手に対して、事実を客観的に記録・報告する白書や新聞記事では、常体が一般的に使用されている。これに対し、住民に生活情報を提供したり、イベントの開催などを知らせたりする広報紙では、住民を尊重・重視する立場から、丁寧度の高い敬体が使われることが多い。これらの例は、ジャンルが常体と敬体の選択に影響する可能性を示している。

2点目は年代差である。同じ方法でBCCWJから取った以下の例を見てみよう。

- (4) 更に厚生省においては、50年度及び51年度において、「産業廃棄物総合処理技術開発調査研究」を行った。(環境白書, 1977)
- (5) 国立環境研究所が整備した「環境GIS」において16年度から公表しています。(環境白書, 2005)

上記はともに白書の例であるが、1977年では常体が用いられており、2005年では敬体が用いられている。もちろん、それぞれ例外も多いが、一般的に見れば、年代が進むにつれて、常体よりは敬体が好まれるようになる可能性がある。以上の5つの例が示すことは、文体の選択にはジャンルや年代といった要因が大きく関係するということである。ジャンルによって敬体・常体の使用状況がどのように異なるのか、同じジャンルでも、それが年代によってどのように異なるのか、これらの解明は言語学のみならず、日本語教育学においても重要であると思われる。

先行研究においても、日本語における常体と敬体の使い分けは盛んに議論されてきたが、日本語の多様なジャンルにおける文体差を比較した研究は少ない。また、ジャンル比較に年代比較を組み合わせたものも少ない。そこで本研究は、多様な言語変種のデータを収録したBCCWJを用

い、ジャンル差と年代差という2つの観点を組み合わせて、日本語における常体・敬体の使用状況の問題を新たな視点から調査することを目指す。

2. 先行研究

常体と敬体に関する研究は多くなされているが、その多くは両者の使い分けに焦点が当てられている。常体と敬体の使用状況を計量的に調査したものは筆者の調べた限りでは多くない。ここでは常体と敬体の使用状況に関する研究を概観する。

日本語と韓国語との比較の観点から、それぞれ使用する文体の特徴を調査した研究として、曹(2010)と鄭(2017)がある。曹(2010)は話し言葉における言いさし表現に注目し、日本映画と韓国映画それぞれ5本のセリフを調査した結果、日本語の言いさし表現では敬体が好まれるのに対し、韓国語の言いさし表現では常体が好まれることが明らかになった。また、使用意識に関しては、日本語の言いさし表現には「柔らかい」イメージがあり、韓国の言いさし表現には「楽」のイメージがあると結論づけている。

鄭(2017)は日韓のスポーツ競技の実況中継における言語表現を比較調査した結果、日本語では常体で終わる発話が多いのに対して、韓国語では常に敬体のみが用いられることを明らかにし、臨場感を重視する日本と、報道性を重視する韓国という、両国の映像メディア言語の語用論的特徴があると述べている。

演説における常体と敬体の使用状況を扱ったものとしては、田中(2004, 2016)、丸山(2016)があげられる。田中(2004)は、『太陽コーパス』に含まれている雑誌『太陽』創刊年(1895年)に掲載されている演説記事を資料に、文末表現に着目して調査を行なったものである。その結果、敬体を主に使う演説中に常体が混じるのは、話し手の思いが強く現れる文であること、常体を主に使う演説中に敬体が混じるのは、演説の冒頭や末尾に位置する文、話題が転換する位置にある文など、相手や場面に対する意識が強く現れる文であることなどが明らかにされている。

田中(2016)は、雑誌『太陽』創刊年(1895年)の演説と『岡田コレクション』(大正時代～昭和10年代)の演説を資料として、明治時代から昭和10年代までの演説の文末表現の変遷を調査したものである。文末に常体と敬体のいずれを用いるかについて、各時代の敬体率(敬体文の数を文の総数で割った比率)を計算した結果、時代が進むに従って、敬体率が次第に増加していることを示した。

演説で使われる日本語は敬体を中心となったという田中(2016)の指摘は丸山(2016)でも検証されている。丸山(2016)は、『岡田コレクション』に収録された大正から昭和前期の演説、および平成期における内閣総理大臣の演説を対象として、文末表現のバリエーションを分析した結果、大正から昭和10年代の30年間の間で、そしてさらに平成期へと移るに従って、「ル」形の割合が減ってきており、文体がより丁寧な形に変化していったと結論づけている。

明治前期の新聞記事に見られる文体の経年変化を調査した研究には島田(2017)がある。島田(2017)は明治7年から20年までの『読売新聞』の文体に注目し、敬体・常体・文語体の推移を調

査した。その結果、明治 15 年まで敬体は 70%程度用いられていたが、それ以降は衰退した。常体の文末は明治 11 年から 15 年までを中心に 10~20%程度用いられていたが、それ以後はほとんど使われない文体となった。文語体は明治十六年以降一気に増加し、その後は文語体中心の書き方となった。なぜこのような変化が起こったのかについては、島田は明治初期に使用される敬体や常体は話し言葉的な表現と結びつきやすいのに対し、文語体はそのような結びつきがなく、時制の表現も豊富であるため、新聞の「書き言葉」に相応しい文体であると結論した。

鶴澤(2009)では、月刊絵本『こどものとも』を対象に、1956 年から 2007 年にかけての 104 冊の本文を「文体(常体・敬体)」の観点から調査した結果、時代変遷による変化は確認されなかったが、全体的に見れば、敬体のみの作品が 7 割、常体のみの作品が 2 割、混合作品が 1 割あると報告されている。敬体で書かれた作品が圧倒的に多いのは、低年齢にとっては、敬体の方が抵抗なく受け入れられやすいためであると述べている。また、常体の混用については、常体の使用は「報告的な地の文」の中で主観的な文を強調するためであると述べている。

「です・ます」体がわかりやすさにつながる要素として機能しているという鶴橋の指摘は東ほか(2006)でも言及されている。東ほか(2006)は、子供向けの新聞、外国人向けの情報などわかりやすさを優先した文章には、「です・ます体」が用いられることが多いと述べ、多くの「書くメディア」において、「です・ます体」がわかりやすさのマーカーとして機能しているのは、「です・ます」を使用することで、話し手・聞き手が擬似的に顕在化されていることによると結論づけている。

北村ほか(2006)は、コミュニケーションにおける話し手と聞き手のあり方によって、伝達場面を「共在」、「非共在」、「疑似共在」の 3 つに分けている。不特定多数の聞き手に発信される新聞・論文などのような非共在の場では、「だ・である」体が典型的に用いられている。一方、非共在の場において、「です・ます」が用いられると、聞き手の存在が顕在化し、話し手と聞き手があたかも疑似共在しているかのような場が作り出される。伝達場面の構造を文法記述に生かす立場は示唆に富んでいる。

以上で見たように、先行研究は、日本語における常体・敬体の使用状況についていくつかの側面を明らかにしてきた。これらの知見は有益なものであるが、いくつかの点について制約も残る。1 点目は、話し言葉の分析に比べると、書き言葉の分析が必ずしも十分ではないことである。2 点目は、ジャンル影響が十分調査されていないことである。従来の書き言葉の文体使用に関する研究では、新聞、雑誌、絵本などのテキストを個別に取り上げて調査を行っている。しかし、ジャンルの分類にはこれ以外にも多様なものが存在するため、複数のジャンルを同一の基準に基づいて比較し、分析を加える必要があると思われる。3 点目は、年代変化が考慮されていないことである。島田(2017)では、明治前期の新聞記事に見られる文体の経年変化を分析しているが、現代日本語を調査対象とする研究はなされていない。言葉は時代とともに変化するものである。常体と敬体の言語形式が変わっていないとしても、使われる社会の変化とともに、片方が多用されるようになってきている可能性が考えられる。また、ジャンルによって年代の変化パターンに違いがあるかについても必ずしも明らかにされていない。4 点目は、ジャンル差と年代差を総合的に評価し、どちらがより

常体・敬体の使用状況に大きく影響を及ぼしているかを明らかにした研究が見当たらないことである。

3. リサーチデザインと手法

3.1 研究目的とリサーチクエスチョン

以上で述べた制約を踏まえた上で、本研究はジャンル差と年代差の視点から、現代日本語における敬体・常体の使用実態を解明することを目指す。具体的には以下の 3 つのリサーチクエスチョン(RQ)を議論の対象とする。

RQ1 現代日本語において、常体・敬体の使用状況はジャンル別にどのように変化しているのか。

RQ2 現代日本語において、常体・敬体の使用状況は年代別にどのように変化しているのか。

RQ3 ジャンル差と年代差のどちらがより常体・敬体の使用状況に大きく影響を及ぼしているか。

事前仮説として、**RQ1**については、法律や白書は客観的かつ明示的な記述が求められることから、常体が圧倒的に優位を占められると思われる。また、字数を節約し、簡潔に情報を伝える新聞でも常体が多用されると考えられる。一方、相手に回答を依頼する知恵袋では、相手を立てる必要があることから、ポライトネスの要素が影響し、敬体が多く使われるのではないかと予測される。また、ほかのジャンルでは明確差がないのではないかとと思われる。

RQ2については、インターネットが普及し、ITなどを利用したコミュニケーションが広がる中で、サンプルで簡潔な表現が好まれるようになってきたことから、年代が進むにつれて、どのジャンルにおいても、敬体よりも常体が増えているのではないかと推測される。

RQ3については、様々なジャンルの中で、最も読者層が幅広く、内容也多岐に富む書籍においては、他のジャンルと比較した場合のジャンル差や年代差が顕著に現れないのではないかと予測される。また、日本語はジャンルによって本質的に異なる性質を持つため、年代差よりもジャンル差の方が強く影響するのではないかと予測される。

3.2 データと手法

2011 年に一般公開された現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)では、日本語を構成する多様なジャンルのテキストが収録されている。その上、BCCWJ は一定の時間幅を持ったサンプルの収録がなされている。この 2 点を踏まえ、BCCWJ は敬体・常体の多様な実態を調査するには適切なコーパスであると判断した。本研究では「中納言」インタフェースを介して BCCWJ の調査を実施する。

本研究では、BCCWJ の 13 ジャンル（出版・雑誌、図書館・書籍、出版・書籍、出版・新聞、ブログ、国会会議録、知恵袋、ベストセラー、韻文、教科書、広報紙、白書、法律）の中で、「出版・書籍」「図書館・書籍」「ベストセラー」を同じ「書籍」ジャンルとみなして一つにまとめる。話し言葉を元とす

る「国会会議録」と日本語として特殊性の高い「韻文」は除き、残りの9ジャンルを調査対象とする。以下は、それぞれの収録資料の刊行年代情報である。

表1 BCCWJにおける収録資料の刊行年代情報

ジャンル	刊行年代
書籍	1971-2005
雑誌	2001-2005
新聞	2001-2005
白書	1976-2005
教科書	2005-2007
広報紙	2008
法律	1976-2005
ブログ	2008
知恵袋	2005

年代別の調査は以下の2つの観点で行う。1つ目は、マクロ的な時間の観点である。30年間のデータが揃っている「法律」「白書」「書籍」の3ジャンルを対象に、1976～1980年、1981～1985年というように、5年単位で調査を行う。なお、白書や法律のデータには1976年以降のものしかないため、書籍の1971～1975のデータは調査対象から除外した。2つ目は、ミクロ的な時間の観点である。2001年以降のデータが収録された「雑誌」「新聞」「教科書」の3ジャンルを取り上げ、1年ごとに調査を行う。

日本語の常体と敬体は一般に、文末表現によって区分される。文末表現の分類方法については、山崎(2011)で示された4分類・12種の表現パターンを基準とする。これら各々について、筆者が検索条件式を設定した。今回の調査では、文末に終助詞が見つからないものだけを調査対象とする。以下はその一覧である。

表2 文末表現の類別と検索条件式

	分類	検索条件式	例
常体 「た」 系列	①動詞＋た	キー：活用型="助動詞-タ" AND 前方共起：(品詞 LIKE "動詞%" OR 品詞 LIKE "形容詞%" OR 語彙素 ="だ") ON 1 WORDS FROM キー AND 後方共起：書字形出現形="." ON 1 WORDS FROM キー	～した。
	②形容詞，形容 動詞＋た		～なかった。
	③～だった，で あった		～だった。
	④～ていた		～であった。
	⑤一般動詞＋た		～ていた。

常体 「非 た」系 列	⑥動詞(終止形)	キー: ((品詞 LIKE "動詞%" OR 品詞 LIKE "形容詞%" OR 語彙素="だ")AND (活用形 LIKE "終止形%" OR 活用形 LIKE "意志推量形%")) AND 後方共起: 書字形出現形="." ON 1 WORDS FROM キー	する。 ている。 ～であろう。 である。 ない。 だ・だろう。
	⑦形容詞・形容 動詞		
	⑧～だ・～である		
	⑨ている		
	⑩一般動詞		
敬体 「た」 系列	⑪です・ます	キー: (語彙素="です" OR 語彙素="ます") AND 後方共起:書字形出現形="." ON 1 WORDS FROM キー	～です。 ～でしょう。 ～ます。 ～ましょう。
敬体 「非 た」系 列	⑫でした・ました	キー: (語彙素="です" OR 語彙素="ます") AND 後方共起: 活用型="助動詞・タ" ON 1 WORDS FROM キー AND 後方共起:書字形出現形="." ON 2 WORDS FROM キー	～でした。 ～ました。

なお、調査にあたっては、「IN (registerName="出版・新聞" AND (core="true" OR core="false"))PUBLISHED IN 2001」のように、年号とジャンルを含めて検索を行った。

RQ1 では、ジャンル別の常体・敬体の使用状況を調査する。まず、BCCWJ で年号を 2000 年代に固定した上で、9 ジャンルごとに、常体「た」系列、常体「非た」系列、敬体「た」系列、敬体「非た」系列の頻度を調べる。次に、粗頻度を1万語あたりの調整頻度に変換し、ジャンルごとの常体率(常体／常体+敬体)を計算する。

次に、RQ2は敬体・常体の使用状況の経年変化を調査する。まず、ジャンルを「書籍」、「白書」、「法律」のいずれかに固定した上で、5年単位で常体率の変化を調べる。また、ジャンルを「雑誌」、「新聞」、「教科書」のいずれかに固定した上で、1年ごとに常体率を調べる。その後、調査期間において、常体と敬体の使用状況がどのように変化しているかを要約するため、常体率を目的変数、年代を説明変数として、単回帰分析を行い、回帰式を得る。

RQ3はジャンル差と年代差のどちらがより常体・敬体の使用状況に大きく影響を及ぼしているかを明らかにするため、年代別ジャンルを第1アイテム、文末表現を第2アイテムとする頻度表を作成し、コレスポンデンス分析を行う。なお、第1アイテムには34カテゴリー(「書籍1976-1980」、「書籍1981-1985」など)、第2アイテムには4カテゴリー(文末表現の4分類)が存在する。

4. 結果と考察

4.1 RQ1 ジャンル影響による常体率の変化

年代要因の影響を抑止するため、年代を固定したうえで、常体率をジャンル別に比較したところ、図1の結果を得た。

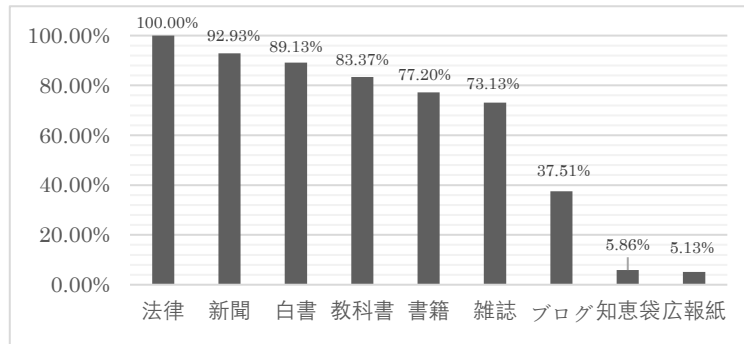


図1 ジャンル別の常体率

図1からわかることは3点ある。1点目は、法律を除けば、すべてのジャンルにおいて、常体と敬体が併存しているということである。このことは、ジャンルごとに、常体または敬体のいずれかが選択されるというよりも、両者の間で、何らかの使い分けを行っている可能性を示している。

2点目は、ジャンルにより、常体率が100%から5.13%まで、20倍近くずれているということである。従来日本語における常体と敬体の議論において、ジャンルを考慮したことは決して多くなかったが、今回のデータ分析の結果は、ジャンルが常体と敬体の選択に大きな影響を及ぼしている可能性を示すものである。

3点目は、全9ジャンルは常体率の点で3つのグループに分けられることである。法律、新聞、白書、教科書、書籍、雑誌の6ジャンルにおいては、常体率が7割を超えており、これらはほぼ「常体基調」のジャンルであると言える。一方、広報紙と知恵袋においては、常体率は10%未満であり、逆にこれらは敬体基調のジャンルであると言える。以上に対し、ブログは常体率が37%であり、約6対4の比率で常体と敬体が混ざって使われていることになる。この点に関して、仁田(2009)は「典型的な書き言葉では、通常、文末は普通体が用いられるものであるため、丁寧体と普通体の対立ということは問題にならない」と指摘している。法律をはじめとする6ジャンルについては、仁田の指摘はそのとおり当てはまるが、今回のデータ分析により、知恵袋や広報紙のようにむしろ「通常、文末は丁寧体が用いられる」書き言葉ジャンルも存在する。

では、なぜこれらのジャンルにおいて、異なる常体率が見られるのであろうか。1つの考え方は、ポライトネス、つまり読み手に対する書き手の配慮のレベルがジャンルによって異なることが影響しているのではないかと考えられる。

まず、「常体基調」グループについて言うと、例(1)～(4)で示されているように、いずれも読み手に過度な配慮を行う必要性は低いと考えられる。例えば、書籍や雑誌(73.13%～77.2%)においては、読者の関心は内容面にあり、丁寧な表現で読者を持ち上げる必要性は強くない。また、教科書(88.37%)については、児童や生徒に対して一定の丁寧な言葉遣いを行う必要はあるものの、読み手は教科書を使って学習することが前提とされており、必要以上に読み手を持ち上げるニーズはやはり低い。さらに、白書や新聞(89.13%～92.13%)においては、読み手の関心は、書籍や雑

誌の場合以上に内容面に集中しており、書き手として読者に過剰な配慮を行わない。また法律(100%)については、伝統的に常体で書くという慣習があることに加え、政府や国家など書き手側がより強い位置にあり、読み手に持ち上げる必要性はほとんど存在しない。

- (1) 中央農業総合研究センターでは、「フィールドサーバ」を開発している。農場をモニターするシステムである。(書籍, 2005)
- (2) すべての物体は、慣性をもっている。(教科書, 2005)
- (3) 政府は訴迫問題で米側との本格的な協議は家族の来日が決まってからとしている。(新聞, 2004)
- (4) 特許業務法人の社員は、すべて業務を執行する権利を有し、義務を負う。(法律, 2000)

次に、「敬体基調」グループについて考えてみたい。知恵袋の場合、質問を投稿する者は、何らかの回答を必要としている。この時、仮に言葉遣いの丁寧さが不足し、読み手が不快な印象を持てば、回答は得られない。つまり、知恵袋の書き手は、普段以上に丁寧な言葉遣いを行い、回答者となりうる可能性のある読者を最大限に持ちあげることが要求されるのであろう。広報紙については、地方公共団体が、住民サービスの一環として、納税者である地域住民に直接的に向けて刊行された読み物であることに注意する必要がある。中央政府と比較し、地方公共団体の主な業務は住民サービスの提供である。したがって、国が刊行し、関心ある読者に対して情報を伝達することが主たる目的となる白書とは異なり、広報紙においては、住民である読者に対してより一層の敬意を払う必要があると考えられる。仮に敬意が十分でなければ、住民の離反を招き、行政に対する協力が失われる危険性もある。

- (5) これって病気なんですか・・・？何科に行けばいいのかわかりません。(知恵袋, 2005)
- (6) 対象となる方へは、4月中旬ごろに「特定健診受診券」をお送りします。(広報紙, 2008)

最後に、「丁寧体と普通体の対立」が顕著に見られるブログについて考える。ブログにおいて、2つの異なる表現モードがほぼ拮抗して存在しているのは、ブログの書き手に、2つの異なる動機が存在するためであると考えられる。1つ目はより多くの読者に読まれ、読者に好感を持たれたいという気持ちである(例7)。もう1つは、読者の反応とは無縁に、書き手が自分の書きたいことを自分の望む形で記録したいという気持ちである(例8)。前者の気持ちが強ければ、敬体が増え、後者の気持ちが強ければ、常体が増えるのではないかと予測される。ブログという媒体において、常体と敬体が他のジャンルに比べるとほぼ拮抗しているのは、ブログの中にこうした二面性が存在するためであると考えられる。

- (7) 今日は青空でもものすごく暑かったのですが・・また雨が降りまた雷です。みなさんのところは大丈夫でしょうか。(ブログ, 2008)
- (8) もう仕事が忙しくて忙しくて、これが精一杯だ。(ブログ, 2008)

以上のように、同じ日本語ではあっても、ジャンルが異なれば、読者に敬意を払い、読者を持ち上げるニーズの程度が変化する。このため、結果として常体と敬体の使用比率に差が生じているのではないかと考えられる。

4.2 RQ2 年代影響による常体率の変化

「書籍」、「白書」、「法律」の3つのジャンルそれぞれについて常体率を年代別に調査したところ、図2の結果を得た。それぞれの破線は、「書籍」、「白書」の変化パターンを要約した単回帰式を示す。いずれの場合も回帰式の係数はマイナスとなり、わずかではあるが、30年の間に常体率が低下していることが確認される。

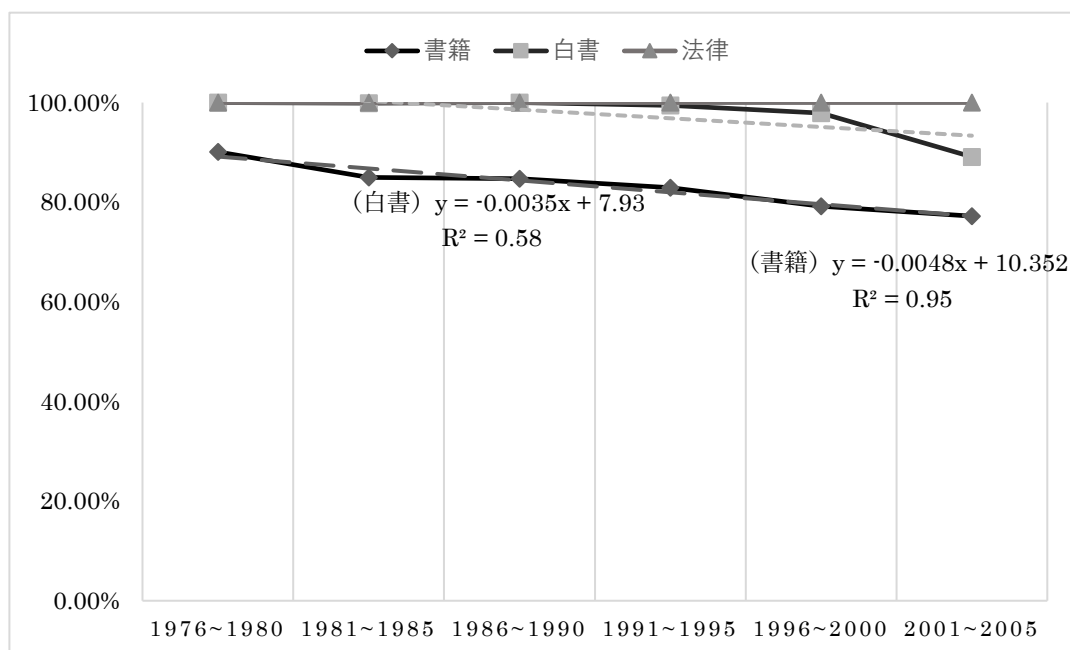


図2 年代別の常体率(1976~2005)

すでに述べたように、法律文書はその性質として常体で記述することが伝統である。ゆえに、1970年代から2000年代までの30年間、法律は常体率が100%で安定している。一方、白書は年代が進むにつれ、常体率が低下してきている傾向が見て取れた。以下の例を見てみよう。

- (9) このうち、船舶あるいは陸上からの油・廃棄物の排出等海洋汚染に直接結びつく実質犯は1649件で、全体の85%を占めている。(環境白書, 1979)

- (10) 陸上からのものが69件と約7割を占めており、そのほとんどが故意による廃棄物の排出でした。(環境白書, 2005)

上記の2つの例はいずれも環境保全の内容を示したものであるが、1970年代は常体で書かれているのに対し、2000年代になると敬体で書かれている。この背景には、いくつかの原因が考えられるが、1つは、白書の位置づけが変わってきたという可能性である。かつては、白書は、政府の側が行政のあり様を報告する文書と見なされており、読み手への配慮はあまりなされていなかった。しかし、現代に近づくにつれ、白書の刊行も、税金で行われている業務であることが広く意識されるようになり、結果として、よりわかりやすく丁寧に記載し、多くの読者に読んでもらうことが重視されるようになったのではないかとと思われる。すでに述べたように、住民と行政の距離が近い地方公共団体が刊行する広報紙については、読者への配慮が要求され、全般的に常体率は低い。白書についても、30年の間に、次第に読者への配慮が求められてきたのではないかと推測する。要するに、納税者に対する意識が高まり、納税者である国民と政府との関係がより重視されるようになるにつれ、白書も敬体で書くことが増えてきたのではないかと考えられる。

書籍もまた年代が進むにつれて、次第に敬体が増えてきている。ここで、書籍の用例を見てみよう。

- (11) ……アメリカ流の、良く言えば理想、悪く言えばたて前という偽善の文化と、日本流の本音の文化の対立である。裁きの文化と甘えの文化の対立とも言えよう。(書籍/社会科学, 1977)

- (12) 明確な言葉を使って表現する、それが英語の特徴です。これは、日本と欧米の文化のちがいが如実にあらわれる、よい例ではないでしょうか。(書籍/社会科学, 2005)

上記の2つはいずれも文化の違いについて書かれた社会科学分野の文章の一部であるが、1970年代の用例は常体で書かれているのに対し、2000年代の用例は敬体で書かれている。この背景には、読者層の大衆化が進んできていることが考えられる。かつては、書籍の中に、専門書や学術書など、書き手中心で、難解な言葉で書かれたものが多かったが、時代の流れの中で、書き手が読み手を一層意識し、より幅広い読者層を獲得するため、わかりやすい言葉で書くようになってきている。したがって、読者層の大衆化に影響され、社会科学のような難しい内容であっても、より丁寧な言葉遣いが求められるようになってきたのではないかと推測される。

以上で、30年間というマクロ的な時間の観点から常体率の変化を調査した。そして、書籍と白書については常体率が低下し、敬体による叙述が少しずつ増えていることを明らかにした。では、現代を対象を絞り、より狭いミクロ的な時間の観点からあらためて観察した場合、どのような傾向が認められるのであろうか。「雑誌」、「新聞」、「教科書」の3つのジャンルそれぞれについて常体率を年代別に調査したところ、図3の結果を得た。

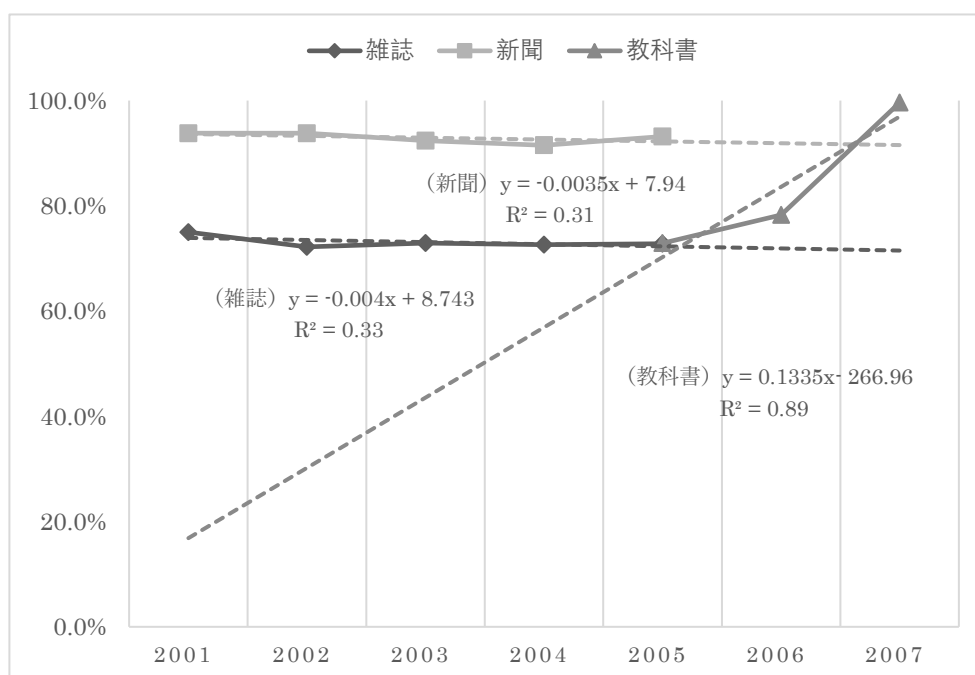


図3 年代別の常体率(2001～2007)

それぞれの破線は、「雑誌」、「新聞」、「教科書」の変化パターンを要約した単回帰式を示す。新聞についても雑誌についても、回帰式の係数はマイナスであり、変化の幅は極めて小さいものの、2001～2005年の5年間に於いて、常体率が若干低下している可能性が示唆された。すでに述べたように、雑誌と新聞はすでに購買済みの読者に対して情報を提供することから、他のジャンルに比べると、読者を立てる必要性は薄い。にもかかわらず、若干ではあるが敬体が増えてきていることは、日本語全体において、読み手に敬意を払うことがより強く求められてきていることの反映ではないかと考えられる。最後に、教科書についてであるが、コーパスに含まれる3年分のデータに限っていると、常体率が上昇しているように見える。しかし、出典を確認したところ、2005年と2006年のデータには様々な教科の教科書が含まれているのに対し、2007年のデータは現代文と音楽の教科書しか含まれていない。これは年代変化によるというよりも、サンプルとされた科目による違いであると考えられる。つまり、教科書に関しては、マクロのレベルで常体率の変化を議論することは適切ではないだろう。そこで、教科書を除いて考えると、書籍、白書、雑誌、新聞のいずれにおいても、年代の変化の中で、徐々にではあるが、常体が減り、敬体が増えてきているという変化の傾向が確認されるのである。

4.3 RQ3 ジャンル影響と年代影響の関係

RQ1とRQ2において、ジャンル差と年代差がともに常体率に影響していることが確認された。では、どちらがより大きな影響要因になっているのであろうか。以上の点を確認するため、コレスポンデンス分析を実行する。コレスポンデンス分析では、性質の似たデータが近傍位置に布置される。

なお、第2軸(縦軸)について言うと、上部には新聞と書籍、真ん中には雑誌、白書、教科書、下部には法律が分類されている。この点を踏まえると、縦軸は情報と説明のバランスを示しているのではないかと考えられる。上部の新聞や書籍においては、中立的な立場から事実を提示することに重きが置かれる。一方、下部の法律においては、事実というより国が決めたルールについて説明を行うことが中心となっている。さらに、中央のゾーンに存在する雑誌、白書、教科書においては、事実の提示とその背景の説明の両方に等しく重きが置かれる。

以上の結果は、読者に敬意を払う必然性と陳述する情報の性質によってそれぞれのジャンルの特性が決まり、それに応じて、適切な常体と敬体のバランスが決定されていることを示しているのではないかと考えられる。

5. まとめ

本研究では、現代日本語書き言葉均衡コーパスを使用し、現代日本語における二つの文体を、(1)常体・敬体の使用状況はジャンル別にどのように変化しているのか、(2)常体・敬体の使用状況は年代別にどのように変化しているのか、(3)ジャンル差と年代差のどちらがより常体・敬体の使用状況に大きく影響を及ぼしているか、という3つの観点から調べた。以下、RQに即して本研究で得られた知見をまとめる。

RQ1(ジャンル影響)については、(1)法律を除いたすべてのジャンルにおいて、常体と敬体が併存していること、(2)ジャンルによって、常体率は100%から5.13%まで20倍近くのズレが存在すること、(3)全9ジャンルは常体率の点で「常体基調」、「敬体優先」、「敬体基調」という3つのグループに分かれること、などが明らかになった。同じ日本語ではあっても、ジャンルにより、読者に敬意を払い、読者を持ち上げるニーズの程度が異なるため、結果として文体選好性に違いが生じることが示唆された。日本語学習者は実際の文章に常体と敬体が混在して使用されていることを知っておく必要があるのではないかと考えられる。

RQ2(年代影響)については、マクロ的な時間の観点から常体率の変化を調査した結果、書籍と白書の常体率が低下してきており、敬体による叙述が少しずつ増えていることが確認された。また、現代に時間を絞り、ミクロ的な時間の観点から観察した場合、雑誌と新聞においても、徐々にではあるが、常体が減り、敬体が増えてきていることが明らかになった。日本語教育の観点から言えば、教師は常にこのような変化を敏感に察知し、文体に対してより柔軟な対応が望ましいだろう。

RQ3(ジャンル影響と年代影響の関係)に関しては、ジャンル差の方がより常体・敬体の使用状況に大きく影響を及ぼしていることが確認された。読者に敬意を払う必然性と陳述する内容の性質によってそれぞれのジャンルの特性が決まり、それに応じて、適切な常体と敬体のバランスが決定されていることが明らかになった。常体と敬体に関する指導をする際に、学習者が伝達内容や読み手を持ち上げるニーズに応じた文体で書けるように、教師はコーパスから取り出した実例をリストアップしながら、異なる文体の表現効果を学習者に提示するのが望ましいだろう。

もともと、本研究には制約も残る。1点目は本研究で使用したコーパスは時系列分析やジャンル内容の属性分析を前提として構築されたものではなく、結果の解釈に慎重さが求められるということである。2点目は、敬体・常体の選択に影響を及ぼしうる要因として、ジャンル影響と年代影響の2要因以外にも影響要因が存在する可能性は残ることである。最後に、今回の分析では文末表現ごとの常体・敬体に注目したが、実際に1つの文章の中で混用が起こっているものも多く見つけられた。それらを取り出して、質的に分析する必要があるだろう。

参考文献

- 東弘子, 加藤良徳, 北村雅則, 石川美紀子, 加藤淳, 宮地朝子(2006)『書くメディア』にあらわれる『です・ます体』のわかりやすさ『言語処理学会第12回年次大会発表論文集』, 24-27.
- 北村雅則, 加藤淳, 石川美紀子, 加藤良徳, 宮地朝子, 東弘子(2006)「伝達場面の構造と『です・ます』の諸機能」『言語処理学会第12回年次大会発表論文集』, 1139-1142.
- 島田むつみ(2017)『読売新聞』における敬体・常体・文語体の推移—明治七年から二十年まで—『国際日本学研究論集』(6), 43-62.
- 肖錦蓮(2019)「日本語学習者の文体の変化: 自由作文における常体シフトの発生要因の解明」『コーパスと文体論のインタフェース 2018 論文集』(採択決定)
- 曹英南(2010)「韓日言いさし表現における使用状況の要素」『日本文化研究』(35), 451-466.
- 高野愛子(2011)「レポート・論文の文体に関する学習者の認識—許容範囲を探るために—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』(37), 77-87.
- 田中牧郎(2004)「雑誌『太陽』創刊年(1895 年)における口語文—敬体を中心に—」『国語論究 11 言文一致運動』(pp 78-108). 明治書院.
- 田中牧郎(2016)「演説の文末表現の変遷—明治時代から昭和 10 年代まで」『SP 盤演説レコードがひらく日本語研究』(pp 248-270). 笠間書院.
- 鶴澤佳奈子(2009)「児童向け作品の文章論的研究—『こどものとも』にみる絵本のことば—」『日本文学』(105), 211-232.
- 鄭恵先(2017)「スポーツ情報番組のジャンルによる語用論的特徴: 日韓対照で見られるスピーチレベルシフトの相違に注目して」『北海道大学国際教育研究センター紀要』(21), 1-13.
- 仁田義雄(2009)「丁寧体と普通体」日本語記述文法研究会(編)『現代日本語文法 7』(pp269-279). くろしお.
- 山崎誠(2011)「文末表現の分布と文体」—『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用して『Japio YEAR BOOK 2011』 280-283.